

涙の効用——アメリカ文学はなぜ泣かないか

川崎医療短期大学 一般教養

安井信子

(平成20年10月31日受理)

The Effects of Tears: Why No Tears in American Literature?

Nobuko YASUI

Department of General Education,

Kawasaki College of Allied Health Professions,

316 Matsushima, Kurashiki, Okayama, 701-0914, Japan

(Received on October 31, 2008)

概要

WASPに代表される主流アメリカ文学の主人公たちは概して泣かない。彼らの多くは離脱者、脱走者、開拓者、狩猟者、戦う者であり、その状況からして泣く余裕がないのである。ヘミングウェイと彼の作品の主人公たちはその好例といえる。彼は二十世紀の「強いアメリカ」の象徴の役を負い、強い男を演じ続け、銃による自殺という自己破滅に至った。弱さを否定し自立した個人を主張する極端なアメリカ的個人主義は、もはや有効でないということを示唆したといえる。ライフサイクルの視点から見れば、人生には幼児期、病氣、災難、老衰期、死など、泣くのが自然であ

る多くの段階や状況がある。涙を流すことはこのような状況を心から受容するしるしの一つであり、こうした経験により偏狭な自我の殻を破ってはじめて人は真の意味で成長し成熟するといえる。ALSになり泣くことと死への道程を肯定したモリー・シユワルツは、涙の受容が他者、世界、宇宙に対して心を開くことに繋がることを示した。アメリカナイズーションにより人々が世界的に泣かなくなってきたとしたら、涙の効用を認めることが今是非とも必要である。

キーワード: 強い男、アメリカ的個人主義、涙の受容、心を開く

Abstract

In the main stream of American literature represented by WASP, the heroes generally do not cry. On the whole they are expatriates, escapees, pioneers, hunters and fighters, who cannot afford to cry or weep. Hemingway and his heroes are good examples. He became a symbol of "Powerful America" in the 20th century, which led him to self-destruction: he shot himself at the age of 61. It suggests the American individualism claiming "an independent individual" is no more valid. From the viewpoint of lifecycle, there are many situations and stages in life in which it is natural that one should cry, such as infancy, illnesses, disasters, senility and death. Shedding tears is one of the signs that one has experienced and accepted such a case in one's heart, and it is only through this acceptance that one can grow up and mature in the truest sense. Dr. Schwartz, who suffered ALS and affirmed tears and death, suggested that acceptance of tears can help us outgrow our shell of ego and become open to others, the world and the universe. If the present Americanization makes fewer and fewer people cry now, it is quite important for us to recognize the effects of tears.

Key words : strong men, American individualism, acceptance of tears, open-mindedness

はじめに

グローバルという言葉が使われ始めて既に久しいが、グローバリゼーションという言葉は、ある意味で実質アメリカナイゼーションと言い換えてもいい。アメリカ文化は今や世界各国に浸透し、その影響はあまりに広く深いので、私たちはそれをほとんど意識していないほどだ。「個人主義」とか「自己実現」という言葉さえ既に手垢がついて、意味の輪郭を失いつつある。ところでアメリカ文学史を一瞥すれば、いわゆるアメリカ的な主要作品に著しく涙が欠如していることに気づく。アメリカ文化は泣かない文化だということが出来る。もしかすると、アメリカ文化の影響を受けた現代人も次第に泣かなくなっているのではないか。ではアメリカ文学の主人公たちはなぜ泣かないのか、私たちが泣かなくなってきたということはどういうことか、現代において泣くことの意味は何なのか。ここではヘミングウェイを取り上げてこうしたことを考察してみたい。

一、勇者としての主人公

二十世紀に「最もアメリカ的な作家」といわれたのはアーネスト・ヘミングウェイである。彼はアメリカ文学史上大物であり、数々の作品は世界でベストセラーとなり、映画化されて更に人気を博したばかりか、『老人と海』を著した後ノーベル賞を受賞した。彼自身いかに

もアメリカ的な人物で、行動的でスポーツを愛好し、釣りや狩猟の名手であり、自然に親しみ、モビリティの高いアメリカ人らしく世界を飛び回り続け、独力で成功を獲得し、アメリカン・ドリームを体現した。その上父母とも旧家のワスプ（白人・アングロサクソン・プロテスタント）である彼は、生粋のワスプだった。現在多民族からなるアメリカも、何といっても建国以来文化の主力を担ったワスプに支えられてきたことは否定できない。だから彼は文化的にも主流に属する作家といえる。また文学技法の上でも、感情を抑制した簡潔で力強い彼の文体は、ハードボイルド・スタイルと呼ばれ、その後のアメリカ文学に多大な影響を与えた。

こうした大御所的存在というだけではなく、とりわけヘミングウェイは「強い男」というイメージが濃厚だった。その作品には苦難に遭っても屈せず、泣かずにストイックに耐える、強い主人公たちが登場するし、本人も酒と女と喧嘩に強く、勝負に関してはとことん負けず嫌いで、巨躯を巧みに操るアウトドア派としてにこやかに雑誌の紙面を飾り、周知の通り作家としても大成功を収めた。決して泣かない作品の主人公たちと同じく、彼自身「弱さ」とか「泣く」というイメージから最も遠い作家といえる。その彼が六十一歳のとき猟銃で自殺をしたとき、一作家の死としては珍しいほど大きなニュースに取り上げられ、世界は愕然として「あのヘミングウェイが！」と訝った。なぜアメリカ文化を代表するほど「強い男」の彼が自殺に至ったか、まずその謎を作品群に探ってみよう。

最初の作品『われらの時代に』（一九二五）は、彼が体験した第一

次大戦の凄惨な短い描写によって、十五の短編を区切つてあるという、ユニークな構成の短編集である。中でも生き生きとした印象を与えるのは、ミシガン湖の自然に触れる少年、青年の経験を綴った短編であり、戦禍、災難、暴力に遭遇して泣く人物は登場するが、主人公たちは概して泣かない。ヘミングウェイは十八歳のとき赤十字隊員としてイタリアで戦争に参加中、恐るべき無意味な死や人間の愚行をつぶさに目撃し、自身も爆撃を受けて重傷を負った。その戦争経験は「光栄、犠牲、神聖」などという言葉の空疎さを痛感させ、親の世代までの表層的な価値観、「お上品な伝統」を吹き飛ばした。この短編の構成が示すように戦争体験は彼の人生と文学を密接に縁取るものであった。翌年出版の『日はまた昇る』は、戦傷で不能となった主人公ジェイクのパリとスペインでの日々を物語る。当時パリに集まるボヘミアンのアメリカ人は数多くいたが、ジェイクも祖国離脱者の一人だった。戦傷ゆえに愛する女性と結ばれないつらさに「彼は泣いた」という一文がある他は涙とは程遠く、むしろ若さとエネルギーに溢れた作品である。

ヘミングウェイを一躍人気作家にした『武器よさらば』（一九二九）は、アメリカ人の青年フレデリックが愚劣な戦争を否定し、イタリア戦線から脱走してイギリス人の恋人キャサリンとスイスに逃亡する物語である。しかしハッピーエンドとは程遠く、キャサリンは出産がもとで赤ん坊ともども死んでしまう。その悲劇的な場面でフレデリックは彼女のベッドの傍らで少し泣くが、この長編で主人公が泣くのはこのたった一行だけで、そのあと「彼はホテルに歩いて帰った」という

ストイックな文で作品は終わっている。『アフリカの緑の丘』（一九三五）は、当時左翼的政治色の濃かった文学界の風潮に逆らうように、アフリカのサファリ経験を綴ったもので、自然の中での狩猟の喜びが描かれ、無論涙とは無縁である。『誰がために鐘は鳴る』（一九四〇）は、アメリカ人ロバートがファシズムと戦うためにスペイン内乱に参加し、困難な任務を果たして英雄的な死を遂げるという物語で、大ベストセラーとなり、映画化もされて人気を博した。ストーリーの展開は、戦争から脱走する『武器よさらば』と正反対であるが、ファシズムとの戦いという大儀を肯定し、死や虚無の恐怖に打ち勝って勇者たることに主眼が置かれたこの作品は、主人公の勇氣と強さという点では前者と共通している。

『河を渡って木立の中へ』（一九五〇）は、軍人としての栄光は過去のものとなり、心臓の病で死期の近づいた五十歳の死を描いたもので、行動も戦闘も克服もなく、全くヘミングウェイらしくないと極めて不評だった。戦闘という非日常の強者を描き続けた彼が、日常、病、老い、弱さというこれまで手がけなかった要素を作品化することが困難だったことは想像に難くない。彼の作品中最もよく知られている『老人と海』（一九五二）は、キューバの腕利きの老漁夫が、不漁続きのあと一人で沖に船出して巨大なマカジキを仕留めるが、帰りに鯨の群れに襲われて獲物を食い尽くされてしまうという物語である。彼は老人とはいえまだ強く、老いと強さが絶妙なバランスを保ち、そのことが老い・単独・不運という逆境に屈服せずストイックに耐える主人公の姿を浮き彫りにしている。引き締まった清澄感に溢れるこ

の作品はベストセラーになったのみならず、批評家からも極めて高い評価を受け、「アメリカ的な美德の叙事詩」とさえ絶賛された。

これらの作品を瞥見すれば、主要な主人公たちは「成長する若者、祖国離脱者、脱走者、狩獵者、闘う者、勇者」という特徴をもっていることがわかる。こうしてみるとそれが皆アメリカの建国と発展の歴史を象徴する言葉であることに改めて驚かされる。まずアメリカ発祥のもととなったイギリスの清教徒は言うに及ばず、アメリカに移住しアメリカ国民となった人々は皆「祖国離脱者」であった。彼らは最初の困難を乗り越え、墮落した旧世界ヨーロッパと異なつて新しく歴史を作り出す国民として、自らをアメリカの新天地にすつくと立つ若々しい「アメリカのアダム」とみなした。当然のこと、歴史は浅く希望は大きい彼らはいわば「成長する若者」の性質を帯びていた。彼らは既成の制度に反発を覚えるとすぐさま「脱走」し、自由の地を求めて移動する傾向があった。ヨーロッパと対照的にアメリカの土地は野生の自然が保たれていたもので、自由の地に至ることは可能に思われたのである。彼らは「狩獵者」として開拓者として西部に進みながら、事実上自然を乱獲破壊していったが、一方では野性的自然への親近感と愛着を育んだ。こうした荒々しい環境では強い者が勝つて生き残るのが原則なので、強者、但し単なる乱暴者ではなく美德ある強者、つまり「勇者」が理想となった。このようなコンテクストでは涙の出る幕はない。自己の願望や理想を追及して自力で闘うために、泣いているゆとりがないからである。

これは何もヘミングウェイに限ったことではない。十九世紀、歴史

をもたぬ故にヨーロッパ文学の垂流だという批判を撥ねつけて独自性を打ち出そうとしたとき、アメリカ文学は必然的にその土地の風土と、それに合わせてその中で生き抜いていく人々の特徴を描き出すことになった。まず「最初の最もアメリカ的な物語」といわれたフェニモア・クーパの『革脚半物語』五部作（一八二三―一八四一）は、白人でありながらインディアンとして生きる高貴なる自然人、ナティ・バンポーを主人公とするが、彼は巧みな狩獵者であり、敵にとつては卓越した戦士でもある。彼は大自然の中で生きることを選んで、恋も断念し家族も持たず最後は自然の中に消えていく。人間の手の触れない自然の中で独力で闘つていくフロンティアの男たち、という神話的イメージはこれによつてはつきりと定着した。有名なメルヴィルの『白鯨』（一八五二）は、安全な陸から遙かに隔たる荒海で、巨大な白鯨に戦いを挑み、ついには海中に沈んでいく船長エイハブを描くが、彼は孤高と狂気の狭間のハンターといえよう。また日本でも根強い人気をもっているソローは、森にごく小さい小屋を建てそこで一人で二年を過ごし、名著『ウォルデン——森の生活』（一八五四）を著した。彼は大学も出たインテリであつたが、既成の観念や制度をことごとく削ぎ落とし、人生の枝葉末節から離脱して、生きることの本質を探究するため妥協することなく闘い続けた。マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』（一八八四）については、ヘミングウェイが「現代アメリカ文学はここから始まった」と述べているのだが、その主人公ハック少年は浮浪児である。町から逃げ出して逃亡奴隷ジムとともに筏でミシシッピ河を下りながら、心ゆくまでその自然に浸

る彼は自由への「永遠の脱走者」と呼んでもいいだろう。

二十世紀に入れば、ジャック・ロンドンの『野性の呼び声』(一九〇三)は、裕福な家に飼われていた犬が荒野の自然に触れて野生に戻っていく物語で、これも人間社会の枠から逞しい大自然への「脱走」と見ることが出来る。ヘミングウェイと同時代の作家グループは、一九二〇年代にアメリカ文学を世界的に開花させたといつてよいが、「失われた世代」と呼ばれた彼らは一時「祖国離脱者」としてパリに暮らし、過去の世代の伝統を否定し新しい価値体系を追及した。トマス・ウルフの『天使よ故郷を見よ』(一九二九)のテーマは、「囚われの檻から脱出できる扉の探求」(つまり脱走)と、「父の探求」(つまり若者の成長)だとされている。また、自然を鋭い目で見つめたスタインベックは『怒りの葡萄』(一九三九)の中で、経済恐慌後天候異変のため難民化した人々のカリフォルニアへの脱走、移住を描いた。二十世紀半ばに爆発的にヒットし、最近も村上春樹氏の新訳で話題となったサリンジャーの『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(一九五二)は、主人公ホールデンを、これまでの強い主人公とは異なり、喧嘩に弱く勉強もできず、時には泣きもするようない見弱者という設定にしている。しかしそれは感受性の鋭さゆえに彼がインチキ名門高校を軽蔑しているからで、感性の面では他を圧倒的に凌駕している「強者」にほかならない。これはニューヨークを舞台とする都会的な小説だが、このホールデンもやはり学校から、家から、今いる場所から「脱走」して行き、最後には肺炎になって療養所で回顧するという筋書きである。尤も本来は「強者」「勇者」であるはずの主人公が一度破綻して

療養所にいることは、これまでのタイプのアメリカ神話が通らない時代となったこと、そして強者の行く末を暗示している。

二、母性の抑圧

ところで強者、勇者を主人公とするヘミングウェイの作品に、母親らしい母親像が完全に欠落していることは多くの研究者によって指摘されている。主な作品に登場する女性は、一人残らず母親になることがない。短編集に出てくるのは不妊の女性や墮胎するカップル、うまくいかない夫婦ばかりであり、『日はまた昇る』の主人公ジェイクが恋するブレットは、気に入った男と寝る自由奔放な英国女性で、母というイメージとは対極的である。『武器よさらば』のキャサリンは出産時に死亡するし、『誰がために鐘は鳴る』ではロバートの恋人マリアはいかにも初々しい若い娘として描かれる。『老人と海』にはそもそも女性が登場しない。まるでヘミングウェイの世界には母親というものがないかのようである。実際、伝記によれば彼の母親は支配的な強い女性であり、父親は押され気味だったという。母親の実家は経済的にも文化的にもゆとりがあり、相当の音楽教育を受けた彼女はプロの歌手を目指したこともあった。父親のほうは清教徒の気風の濃い旧家というものの豊かではなく、医師としての収入も乏しく、音楽を教える母親の収入のほうが遥かに多かった。しかも母親はヘミングウェイが幼い頃女の子の格好をさせ、最初に生まれた長女と双子のようにして育てた。このような環境の中で抑圧的な母親に反抗し、自立した「強い男」になろうとする欲求は当然強化されたにちがいない

い。そのとおり彼はあつぱれ強い男となり、やがて「アメリカの国民的ヒーロー」的なイメージさえ帯びて、彼の作品から母親は徹底的に抹殺された。

母親不在——実はこれもまたヘミングウェイに限ったことではない。先に挙げた作品群、『革脚半物語』、『ウォルデン』、『白鯨』、『ハックルベリーの冒険』等にも特徴的に母親が欠落しているのである。十六歳の少年を主人公とする『キャッチャー・イン・ザ・ライ』でさえ殆ど彼の一人舞台であり、彼の心を支えるのは神童といわれた聡明な亡き弟と愛らしい妹であつて、両親の出る幕はほほえないといつてよい。もちろんアメリカ文学の中にも母親や親子や家族を描いた作品は多いが、主流ワスプの傑作といわれる系列には、やはり荒野を進む個人、世界に対峙する個人など、脱走者や勇者である強者が圧倒的に目立つ。これは何といつても前述したアメリカ建国事情の影響が大きい。祖国を離脱しアメリカに移住した人々が、過去を捨てて未来に賭けたということは、彼らには歴史や伝統の束縛もない代わりに抛りかかるべき保護も支えないということだ。幾世代を経た家の落ち着いた空気が、子供を育む文化的蓄積のある親の庇護も、暖かく包んでくれる母性的雰囲気もなく、荒々しい環境の中で彼らは自分一人の力を信じて闘い前進するしかなかった。こうした社会状況を文学は如実に反映しているのである。

十八世紀のアメリカを旅行して書いた手紙で有名となったフランス人トクヴィルは、ヨーロッパと比較するとアメリカは、習慣も家族の決まりごととも階級もなく、自分自身の力で手段を選ばず結果を得よう

とする国だと述べているが、この出発点はアメリカという国を特徴づけることとなった。拘束はするが保護してくれ、家庭、階層、社会制度がまだできていない剥き出しの更地で、めいめい個人が自分の力だけで、「手段を選ばず」（つまり暴力も辞さず）人生を切り開いていくのである。このような社会に子供を適応させるためには、母親は当然「早く自立せよ、強くあれ」という姿勢で子育てをする。「つらいときにすがって泣くことができる母の胸」などというイメージは形成されない。アメリカの母親像には、日本人の心の底に残存する「おふくろ、ふるさと、母なる自然」といった連想や、回帰する所というイメージはない。父親は時として「強者」のモデルとして役立つが母親はそうではない。母親が強者となった場合はヘミングウェイの母親のように抑圧者となり、子供を慈しみ育む母という役から外れがちだし、優しすぎれば子の自立の妨げとなる。アメリカのフェミニズムは「女性の」権利を求めるといふより、「女性も男性と同様に自力で道を切り開く」権利を求める面が強い。自立せる個人として女性が男性と競争せねばならないとなると、子育ては女性の自己実現やキャリアの邪魔になり、母親は子供への愛情と自己の個人としての達成との間で分断される。「脱走者」「勇者」「強者」ばかりの競争社会では、母であることは確かに困難であるにちがいない。「強者」の男性原理の偏重は、母性の抑圧や弱体化と表裏一体なのである。

このように母性が希薄な文化では、子供が母親に泣いてすがりにくいように、苦境に陥った人々も泣くことができない。強者論理の社会では基本的に弱者は容認されず、泣くことは弱者のしるしとなり否定

される。ここでは弱者たる子供は大人の単なる前段階であり、病人や老人は敗北者である。してみるとヘミングウェイが『河を渡って木立の中へ』で心臓病の老犬佐の死を描こうとしたとき、作品として失敗したのも無理のない話といえよう。『老人と海』では確かに「老人」の主人公が描かれてはいるが、まだ心身ともに中々強く、不運な漁夫であつても決して弱者ではなく、涙を流すことは一度もない。しかしアメリカならぬキューバが舞台のこの小説には、老人のために泣いてくれる一人の少年が登場する。老人から漁の技を教わり、細やかに老人の世話をするこの少年は、獲物の大魚を鮫に食い尽くされ、傷を負い疲労困憊した老人を見て「ひどく泣いた」。最後は少年が眠る老人のそばに座つてじつと見守り、「老人はライオンの夢を見ていた」という文で結ばれている。老人の面倒を見、彼の苦勞を思つて涙を流す少年はまるで母親のようだ。泣かずに耐える勇者は主人公が担い、涙と母性はイノセントな少年が引き受ける——つまり弱さとその受容は主人公の外部に追放されている。ちなみにこの小説の種となつた実話では、キューバの老漁夫が沖に出過ぎて大魚を鮫に食われ、漂流していたところを救われたときには「大声で泣いて」いたという。

多くの研究者が指摘しているように、ヘミングウェイはいつも闘つていた。彼は常に男らしさと勇氣にこだわつた。一九九九年から一九六一年という彼の生涯は、二つの世界大戦が起こつた二十世紀前半、ちやうどアメリカが最も強力な国家であつた時代に当たり、彼はまさしく「アメリカの強い男」のイメージを担うのに格好の人物だつた。しかしその彼が泣いた(！)という有名な話がある。当時キューバに

住んでいた彼は犬や猫を可愛がり、特に彼の猫好きは知られていた。家には多くの猫が飼われていたが、その中で子猫を殺す同属殺しの癖がついた猫がいて、彼は涙をぼろぼろ流しながらその猫をわが手で射殺したという。人には決して見せなかつたけれども、彼は一面極めて繊細な感受性をもつていた。「猫は正直で、人間のように感情を隠したりしないから好きだ」と彼は弟に話したことがある。おそらく動物に對するときは、自然に向かうのと同じく、彼も素直に自分の感情を現すことができたのだ。彼の自然に對する並々ならぬ愛着には、泣くことを許さぬ強者の国、「強い男」でいなければならぬアメリカからの自由を望む気持ちが含まれていたにちがいない。彼の死後に発表された『エデンの園』には男性原理からの逸脱の試みが、『夜明けの真実』(邦題「ケニア」)にはアメリカ文明からの離脱願望が語られている。

しかし結局彼は最後までアメリカ人であることを手放せなかつた。彼自身、勇者たらんとして弱者となることを許せなかつたばかりでなく、彼の周りも「強者」以外の彼のイメージを拒絶した。度重なる事故や無理が祟つて年とともに健康を害し、鬱病を病んでいても偽名で入院せざるをえなかつた彼には、弱さを受け入れられる場もなく、涙への道は絶たれていたのである。政情不安のため愛するキューバからアメリカのアイダホ州に移つた彼は、もはや勇者たりえない自己を抹殺する力があるうちにと駆り立てられるかのように、一九六一年、愛用の猟銃で自分の頭を撃ち抜いた。『老人と海』の老人にはまだ程遠い、六十一の歳であつた。藤原新也氏は、ヘミングウェイは何かに追

われるようにすごいスピードで老いていったが、それは当時のアメリカの資本主義のスピードだと対談で述べている。実際晩年のヘミングウェイは老いることと金がなくなることとをひどく恐れていた。藤原氏が「肉体と金だけという意味では非常にアメリカ的な人だ」と語ると、今村梢夫氏は「死に方までアメリカ的だ」と応じている。病むこと、老いること、弱者の立場になることは人間の常であるが、それを受け入れ抱きとめる場が極めて希薄なアメリカ文化は、泣くことが許されない文化であり、母性が抑圧された文化である。その中でヘミングウェイは、「強者」の原理によって生きる人間が辿る破綻の行末を明示したのだ。

三、涙の意味

ヘミングウェイ自殺の翌年、レイチエル・カーソンの『沈黙の春』（一九六二）が、翌々年にベティ・フリーダンの『女性の創造』（一九六三）が出版され、以後環境問題、ジェンダー論、対抗文化、エコロジー運動等でアメリカ文化は大きく揺さぶられ始めた。しかし強者の原理は現在も依然として文化の奥深くに根を下ろしているようだ。実際アメリカは広井良典氏の言葉を借りると、先進諸国の中で唯一「普遍的な公的医療保障」を持たない国であり、社会保障の水準も極めて低い。^②「自立した個人」にのみ基本的な価値を置くので、自立できない病人、老人、貧者、障害者等の弱者は切り捨てられ、死滅、暴力、犯罪へ向かうしかなく、このことは結局社会全体の持続可能性を低下させる。このアメリカ的な「自立した個人」の激烈な追求、強者の原

理という行過ぎた個人主義、身勝手な人間中心主義こそ、弱者の立場と同様に環境保護も無視してきたのだ。それはアメリカのみならず全世界に波及し、人々は皆「自立した個人」として強者の原理に走り、その結果今私たちは地球温暖化をはじめとする前代未聞のグローバルな危機を迎えており、待ったなしの転換を迫られている。

確かにどの時代もどの国の興亡もすべてプロセスとして必然性があるのだろうが、涙の欠如したアメリカ文学から私たちが今学べることの一つは、「強者」を普遍的モデルとする人間観の見直しである。現実には、人は生まれてきたときは無力そのものだし、子供はよく泣く依存者であり、成人となっても失敗、病氣、挫折等、誰しも思わず涙を流す時はあるものだ。年老いるにつれて精神的に（順調に行けば）老成しても、身体的には再び無力に戻っていく。老人は涙もろいといく言われるが、それは毫碌といったネガティブなものとは限らず、発信型の身体エネルギーが低下するため受信力が高まり、外界に対して感受性が高くなるためという一面もある。こうして無力で生まれて成長し、また無力となり他界するまでの全プロセスがこの世の人間であり、涙はそれに伴う自然な発達過程の現象である。人間が「強者」である時期はそのほんの一部に過ぎず、それを人生の基準にしようというのは土台無理な話だ。そもそも「自立した個人」も一つの抽象概念にすぎない。人間は空気、水、食物、山川草木、大地、太陽がなければ生きていけないが、それは人間が作ったものではない。睡眠中は人は「自立」してなどいないし、起きている時もこちらの意識と関係なく鼓動してくれる心臓によって生かされている。誕生する時も自立し

ていないし、自分の死も通常自由意志で決定できない。人間は実は生かされているのだということを、苦境に陥って、あるいは老いに向かうとともに、しばしば人は実感し始める。

自立した個人として頑張ってきた者が、挫折、敗北、老・病・死などに直面してついに涙を流すとき、初めて自力の限界を知り、自分以外の何かに対して降伏する。それは他者、あるいは自己よりも大きな何か(自然、共同体、先祖、宇宙、神など)に対して自分を開き、明け渡すことである。東洋治療の専門家たちは「泣いた後は必ずその前より体が弛む」と言うが、これは泣くことによってこわばっていた心身が弛み、自然の経過に沿って次の段階に入るようになるためである。泣くことはしばしば一旦自己を手放し、自己をゆだね、自己よりも大きなものに繋がるといふ極めて重要な意味をもっている。それは子供から成人へ、小我としての成人から大我すなわち真の人間へと、最大の精神的成熟をもたらす契機となる。それほどの飛躍的自己成長は通常苦難の涙なくしては困難であろう。だから幸か不幸か人生で泣くほどの事態を一度も体験せず、全生涯を愉快で快適に送ったとすれば、その人は未熟な自己のまま人生を終えることになる^①とさえいっている。その意味で、一九九八年アメリカで出版され、TVでもインタヴューが放映されて大きな反響を呼んだ『モリー先生との火曜日』は、アメリカ文化の文脈上非常に興味深いものである。

社会心理学の教授モリー・シユワルツは、ヘミングウェイとは対照的に小柄でソフトでシャイで、人との心の交流を大切にし、人の話に身を入れて耳を傾ける男だった。音楽と我流のダンスを愛好してすこ

ぶる健康だった彼は、晩年に全身の筋肉が次第に下から麻痺していくALS(筋萎縮性側索硬化症)に襲われた。すべてを人に依存せざるを得ないALSになるということは、自立、独立が最高の価値とされるアメリカ文化の中ではとりわけ苛酷なことである。しかし彼は「残された時間に最善を尽くして」生きようと決意し、人々に「死ぬことは恥ずかしいことではない。誰だっていずれ死ぬんだから自分はかなり役に立ってるんじゃないか? 研究対象になれる。人間教科書に。ゆっくりに辛抱強く死んでいく私を研究してほしい。私にどんなことが起こるかよく見てくれ。私に学べ」とメッセージを送った。そして穏やかに、謙虚に、ユーモラスに、力強く「生と死の架け橋を渡るその道すがら」の体験を伝えたのである。弱って死んでいくことは無論つくく悲しいことであり、「歎き、悲しみ、絶望、苦痛」を感じるとき彼は「涙が涸れるまで」泣いた^②。自己の苦境によって「苦しんでいる人が今までもなく身近に感じられる」ようになり、不幸な人々のためにも泣いた。「しばらく泣くと、そのような深い感情を表現したこと、それが表現できたことに安心します。(中略)こんな風に悲しみ歎いた後では、その日の生活に立ち向かい、家族や友人の世話をし、人に愛情を持ち、どんなことが起こっても驚かない覚悟を持つことが前より容易になります」と彼は泣くことを肯定している^③。

悲しみの中にも彼は、愛する人たちと繋がっていること、死に対して準備する十分な時間があることを感謝していた。依存すること、弱者であることを柔和に受け入れ肯定して、「人生の初め、子供のときには生きていくのにほかの人が必要だろうか? 人生の終わりにも、私の

ようになれば生きていくのにほかの人が必要だろう？しかしこれが大事なところで、その中間でもやっぱりほかの人が必要なんだよ」と話した。涙がこぼれるときは素直に泣く自分を、モリーは人前でもTVカメラの前でも隠さなかった。泣かないアメリカ文化に適応しているTVインタヴューアーも教え子も、最後には心打たれて涙をこぼしてしまう。泣くことを許されるということがあるがままの自分を受け入れられることである。こうしたモリーの温かさは多くの人に伝わって、彼の人生最後の何ヶ月かには訪問者の途絶えることがなかった。みなモリーを気づかっていたというより「モリーが気づかってくれからこそ来たのだ」と教え子の一人ミッチ・アルボムは言う⁵⁾。別の教え子ポール・ソルマンによれば「モリーにとって人生とは——他人に対し、世界に対し、そして終局的には我々より大きなあるものに対して——愛情を込めて自分の心を開放するプロセスだった。臨終の瞬間に至るまで、モリーの心は驚嘆と喜びの念に溢れていた⁶⁾。姓名や生き方から察せられるようにモリー・シュワルツはワスプではなくユダヤ系だったが、しかし宗派宗教には関わず、寛容な人間愛に根ざした世界観をもっていた。彼はアメリカ文化が容認しなかった弱者たることを、アメリカ文化の伝統である勇氣をもって肯定したのである。本書がベストセラーとなり今も読まれ続けているということは、涙なき強者のアメリカ文化が変容しつつある兆しといえるのかもしれない。

モリーが泣くことができたのは、彼が「他人、世界、我々より大きなあるもの」に対して心を開き、繋がっていたからであろう。ヘミングウェイがアメリカに住まずアフリカやキューバを愛していたのは、

そういう「自分より大きなあるもの」に開かれた風土を希求していたためにちがいない。「自立した個人」「強者」としてあくまで泣かずに頑張るのは、その個人を成り立たせているものを拒否し、殻のまま自閉して生きることだ。例えば身体には健康になろうとする動きがもともと備わっていて「自然治癒力」と呼ばれているが、それは個人の意思など超えたものである。野口晴哉によれば、一般に人が風邪を引くのはより健康になろうとする身体調整の現われであり、薬物によって諸症状を押さえ込むのはそれを阻害することになる。だから風邪は排除すべきものではなく、うまく経過するべきものであると彼は『風邪の効用』で述べている。同様に人間の本質には成長し成熟し広がる働きがあつて、無闇に涙を抑圧することはそれを阻害することであり、狭小な自我の段階に留まってしまふことだ。この狭小で不安定な自我を強化しようとして「自立した」個人は「強さ」に固執するのである。ヘミングウェイの自殺はまさしくその固執の行き着く先といつてよい。「強さ」にこだわらず泣いてもよいということは、個々人の弱さ小ささを認識し、自分を支えている大きなものを受け入れてそれと繋がりがうることであり、その点で他の人々とも繋がっているということである。「自立した」「強い」個人という妄執に囚われている現代人は、これを「涙の効用」として銘記すべきではないだろうか。

対照的に日本では、古来涙は明らかに抑制も拒否もされなかった。『伊勢物語』、『源氏物語』、『平家物語』などどれを取り上げてみても、男も女も実によく泣いており、多くの和歌においても涙はむしろ感受性の高さのしるしとして賞賛されていた。これはもともと母系的であ

った日本文化の、「自己より大きなもの」を感得する伝統と関係があると思われる。特に日本文学には自然を契機として「自己が大自然に融け込む」という体感を持つ例が多い。自分という小さな存在は「流れに浮かぶ泡沫」であり、「宇宙大河の一滴」、「大海の波頭」によく喻えられる。しかし自己は取るに足りない小さい存在であるとしても、大いなる流れ、宇宙の大河、大海という無限なるものに支えられ、包まれ、融けこんでいる。「国破れて山河あり」という芭蕉の言葉に、夢幻のごとく消える人間の野望欲望に対して山川草木は悠久不変である、と感じる日本人は多い。このように人間が無限なる大自然に包まれ母なる大地に受け入れられているとすれば、その中で泣くことは当然許される。かくして日本の男女ははばかりことなく素直に涙を流してきた。しかし時代が下るにつれて男性は女性よりも泣かない風潮となり、十七世紀に記された「男泣き」という言葉(初出「好色二代男」)は、男はめったに泣かないという前提ができていたことを示す。西洋の影響を受けるとともに涙はさらに減少し、柳田國男は「洩泣史談」(一九四一)で、日本人が昔ほど泣かなくなったことに触れ、「泣くということが一種の表現手段であったのを忘れかかっている」、言葉ではかなわぬから泣くのであるのに「言葉というものの力を過信している」、泣くことは「人間交通の必要な一つの働きである」と述べている⁷⁾。とはいえ欧米に比べれば、日本は泣くことに対する禁忌がはるかに少なく、それだけ他者や自己より大きなものへと繋がる伝統が強く、「涙の効用」を改めて認めるには相応しい民族といえよう。

おわりに

涙といってもいろいろで、無論泣けばよいというものではない。公の場では涙を見せず一人密かに泣くことが妥当である場合は多いし、自分なりの努力もせず無闇に泣くことは単なる依存である。日本文化の涙においても、依存や癒着や無責任にすぎない涙も多かったであろう。安易な涙は大いに戒めなければならない。しかし昨今のように、「自立した個人」が各自の利益や願望を主張し、たまたま弱者の立場になった人々を「自己責任」という言葉で見捨て、社会全体のリスクが高まっていくというアメリカ的グローバルな傾向においては、泣くことを見直す必要がある。人々が互いに助け合わなくとも、個々人が自らの力だけで人生を乗り越えていけるという、二十世紀のアメリカのような例外的な時代がもはや終わったことは明白である。いかなる人も強者の立場から弱者になりうるし、弱者の時期をもたぬ人間はいない。そのことを認め、泣くことを受容肯定することは、とりあえず人間と人間、人間と自然の繋がりを取り戻す糸口となる。この小論を著したあと、偶然多田富雄氏の『寡黙なる巨人』を読んだ。高名な学者としての絶頂にあった氏は、脳卒中のため身体を自由に失い、一夜にして弱者のどん底に転落された。その絶望を乗り越えりハビリの努力をしつつ、私たちにメッセージを発し続けている氏は、先立った人々を思い心行くまで泣いてまた生きる力を回復する一節を「涙の効用」と題されていて、筆者はその偶然の一致に驚いた。氏の人間としての深さは、発作後の方がはるかに読者の心を打つのである。涙の肯定は、人間の、社会の、人類の治癒、成熟、進化を促す効用が

あることは間違いない。

註

- (1) 「ユリイカ」(一九九九年八月号) ヘミングウェイ特集 インタヴュー.. 淋しいアメリカ人の肖像、一〇二頁、青土社、東京、一九九九
- (2) 広井良典『持続可能な福祉社会』、七三頁、筑摩書房、東京、二〇〇六
- (3) ミッチ・アルボム『モリー先生との火曜日』別宮貞徳訳、四九頁、日本放送出版協会、東京、二〇〇四
- (4) モリス・シュワルツ『モリー先生の最終講義』松田銃訳、五一頁、飛鳥新社、東京、一九九八
- (5) 『モリー先生との火曜日』一五九頁
- (6) 『モリー先生の最終講義』一一頁
- (7) 柳田国男『遠野物語』、「涕泣史談」一二〇～一二四頁、集英社、東京、二〇〇七